

[評者]
川島篤志
福知山市民病院研究研修センター長/総合内科・医長



ジェネラリストのための 内科外来マニュアル

第2版

金城光代, 金城紀与史, 岸田直樹 編

● A5変型 頁736 2017年4月

定価：本体5,400円＋税

[ISBN978-4-260-02806-6]医学書院刊

◆外来診療の良書がパワーアップして戻ってきた

皆さんの外来 Debut は卒後何年目であったでしょうか？ 病院規模や担当診療科によって違うだろうが、そのときの不安な気持ちは覚えているだろうか？ 日本の医療現場において、外来診療教育は明らかに遅れている。病棟診療とも救急診療とも違う能力が必要で、初診外来と継続外来でも求められるスキルに違いがある。その違いを知る3人の編者によってまとめられた良書がパワーアップして戻ってきた。

「イントロダクション」から編者の熱い想いが伝わってくる。初診外来での「身体所見と病歴を行き来する」「患者の解釈モデルを訊く」ことはベテラン医師も納得である。継続外来における「少なくとも年に一度は次の項目を見直す」の項目は、外来の引き継ぎや紹介・逆紹介をする際にも意識すべき重要点でもあり、広く浸透を期待する。外来診療では避けて通れない「感染症診療・抗菌薬適正使用」も必読である。

◆ベテランもうならせる臨床コラムが随所に

外来では臓器別診療でなくジェネラリストとしての対応が期待されることが多い。内科医として押さえる

べき主要疾患がコンパクトにまとめられていることや、予防という観点についても触れられているのは心強い。Physician's Memo というコラムには、渋い項目(口内炎・味覚異常・Incidentaloma など)が散りばめられ、ベテラン医師でも思わずチェックしてしまうだろう。

惜しむらくは、超高齢社会の医療における“主治医・かかりつけ医”の概念について編者らの想いを伝えて欲しかった。緩和ケア領域の Surprise questions(「もし目の前の患者さんが1年以内に死亡したとしたら驚くであろうか」と自問自答する質問)になぞらえて、“入院しても主治医として驚かない”病状にある患者(特に非悪性疾患である COPD, 心不全の Stage D, フレイル, 認知症など)は、外来の時点から医療情報を整理・要約する努力が必要で、円滑な救急・入院診療につなげられると提言したい。

“ジェネラリスト”としての対応が求められる外来には、不安がつきものである。指導医も簡単には見つからない。それを補完してくれる秀逸なマニュアルであり、外来にかかわる医師にとって必携の書籍になることは間違いない。